

戦前期日本における「農村社会学」の成立・展開過程の再検討 (1)

——さまざまな農村社会学論のなかから——

東京国際大学 高田知和

1 目的

一般に戦前期の「農村社会学」は有賀喜左衛門・鈴木栄太郎の業績によって成立したというのが通説で、たとえ「農村社会学」の名称を冠していても、有賀・鈴木以外の業績はほとんど顧みられてこなかった。そのなかで、蓮見音彦や似田貝香門は精力的に有賀・鈴木以外の先駆的な業績を取り上げたり、佐藤健二も調査史の観点から問題提起を行なったが、その後こうした問題関心は持続されず、依然として戦前期の「農村社会学」の研究が深められたとはいえない。我々は、既に日本社会学会第85回大会で有賀・鈴木とは異なる「農村社会学」について報告しており、今回はそれを発展させたものである。

2 方法

近代日本資本主義の指導者であった渋沢栄一の孫にあたる渋沢敬三は、祖父栄一の伝記を編纂するに際し、「畜に出来上った、成功した多くの仕事の資料以外に、どんなに、不成功に終ったりまた無駄な努力がし続けられていたかということ、たといその例證が一つ一つ挙げられなくとも、そうしたものが極めて沢山あったであらうということ考を置いて、それらの事業を深く検討して戴きたい」と注文をつけたという。我々が考察する戦前期の「農村社会学」もこれと同じで、農村社会学論といってよいさまざまな断簡零墨と実践のなかから「農村社会学」が成立してきた過程を丁寧に跡づける必要がある。

そもそも近代日本では、有賀・鈴木が「農村社会学」を成立させる以前から、「農」についてさまざまに言われてきた。そのなかで昭和初年以降にいたって有賀・鈴木の「農村社会学」が登場し、アカデミズムで「農村社会学」という学知のため固有の対象領域が作られてくる。その結果、その対象領域から洩れた「農」に関する思考が多々出てくるが、蓮見が「農村社会学」の先駆的業績の一つとして横山源之助の『日本之下層社会』を紹介し(1967)、また昭和初期のジャーナリストを評価した(1981)のも、かような点に着目してのことだと考えられる。我々は、こうした観点に着目し、戦前期の「農村社会学」の多様性を歴史的な脈のなかで捉え直していく。

3 結果

本報告自体は、上記の視角から主として帝国農会系の農村調査とそれに基づく地域計画・地域振興などについて見ていく。特に、上記渋沢栄一の郷里である埼玉県八基村で大正末から昭和初期にかけて行なわれた「産業基本調査」と、それに基づいた地域計画とその実践を取り上げる。そしてこれらの作業を通じて、戦前期の「農村社会学」が削ぎ落としていった部分の意義を再検証する。

4 結論

戦前期の「農」をめぐるさまざまな思考や実践の事例を集めていくなかで、結果的に「農村社会学」に収斂されなかったものに着目し、その意義について改めて指摘する。

参考文献

平井雄一郎・高田知和編著『記憶と記録のなかの渋沢栄一』法政大学出版局、平成26

蓮見音彦「日本農村社会学小史(1)―農村社会学の先駆的研究―」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』第19集、昭和42

蓮見音彦「大正・昭和初期の『農村社会学』(2)―日本農村社会学小史(3)―」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』第33集、昭和56